



柳澤雅之・阿部健一 編著
『No Life, No Forest
—熱帯林の「価値命題」を暮らしから問う』

京都大学学術出版会 2021年 290ページ

ISBN 978-4-8140-0334-1

本書は、熱帯林にかかわる人々と彼ら・彼女らのおかれた環境を、最も身近な外部者として参与観察してきた若手人類学者たちの視点から理解しようとする試みである。アマゾン熱帯林の火災・伐採や気候変動問題にまつわる報道や研究によって、熱帯林に関する問題に注目が集まっている。しかしその問題関心は、おもに国家と国際社会、企業と開発など、地球規模の社会経済の仕組みが森林と人の関係をどのように左右するのかという点にある。そのため、そこに住む人々がいかに森林とともに暮らしているのかという点を捨象してしまうことが多かった。もっとも編者が述べるように、本書は、森に住むものは「かわいそうな人たち」で、伐採業者は「森林破壊の元凶である」といったステレオタイプな見方を無批判には許容しない。なぜなら、そうした思い込みをもつことは、森に住むものたちに独善的な正義を振りかざすことになりかねないことを、在地で当事者たちと真摯に付き合ってきた執筆者たちが一番よく理解しているからである。

本書は序章・終章と9章からなり、アフリカ、ラテンアメリカ、東南アジアの熱帯林における森林と人の多様な関係を紹介している。ラテンアメリカからは、ペルー・アマゾンニアのシピオ（第3章）、パナマ東部の先住民エンペラ（第4章）、パナマ中部の農村（第8章）、ブラジル・アマゾン熱帯林のエスペディト・ヒベイロの人々（第9章）など、いずれもアマゾン地域の事例が取り上げられている。そして終章の「人を生かす森、森を生かす人」では、異なる地域と人々を調査対象としながらも、各章に通底する点として、人々のローカルな活動、生業体系や在地で蓄積された慣習の変化など、現代の同時期に共通して起きている熱帯林と人とのつながりを示している。

本書の特徴は、そこに住む人もその森林を構成する一部であることを示した点にある。熱帯林は単に生活の糧を得るための経済的資源ではない。熱帯林を物質的にも精神的にも必要とする人たちがいることを理解して、はじめて森林の管理や保護が成立する。一般に人の営みは森を破壊するものと考えがちだが、資本主義経済に組み込まれることなく、人が豊かで主体的な生き方を選択できることが、むしろ経済開発と森林保全の均衡を保ち、より豊かな森を創造する基盤となるのではとの投げかけは、人と自然が共生する社会を模索するうえで、現代的な示唆がある。本書はまた、熱帯林はその資源を交換することに価値があるとの近代的な意味づけを問い直し、熱帯林と人はどうあるべきかという主張を問いかける学術書でもある。扇動的な印象を与えずに、執筆者たちと森に住むものとの逸話には思わず感情が揺さぶられる。読む者の心が温まる本だ。

舛方周一郎（ますかた・しゅういちろう／東京外国語大学）